

編集」始まります

6人の委員さんを紹介



いろいろな人が集まれば、それは社会という形になります。いろいろな人が集まった社会です。いろいろな価値観が存在するのは当然です。自分の常識が人の非常識であったという経験はありませんか。

自分の考え方や価値観を、おののの人が押し通そうとすればどうなるか、言うまでもありません。

市民の一人として

大崎優子(朝日町一丁目・47歳)

「市民として広報の企画、編集に参加することになり、これから追いかけていくテーマはと考える……」と迷いましたが、前橋には「水と緑と詩のまち」という素晴らしいキャッチフレーズがあります。このフレーズが輝いていることが、前橋の住

市民の目で

岡村巻枝(小屋原町・44歳)

人として暮らしやすく、また、ここを訪れる人にとつても、心地よく感じてもらえるはず。大きなとらえ方とすれば「環境問題」ということになり、自分が、自分たちの使っている水のこと、身近な川の様子、同じ市内でも異なる自然など、広報紙愛



読者の皆さんの意見を最優先にして、紙面に載せていきたいと考えています。

生まれも育ちも前橋という人転入されてきた人の「市民の目」の役割を果たせたらと思います。

公募で選ばれた市民の代表の皆さんが作る「市民編集のページ」が、今号からスタート。毎月十五日号で二ページを担当します。六人の市民編集委員の皆さんは、それぞれ仕事や家事・育児などで忙しい毎日を送っているにもかかわらず、ボランティアで「広報まえばし」の紙面づくりに参加。任期は来年の三月までの予定です。

編集委員の皆さんは、これまで三回の会議を重ね、編集方針などを話し合ってきました。今号では初回として、六人の皆さんの応募動機や問題意識、編集に向けた意気込みなどを紹介します。

次世代へバトンを

金本謙二(小相木町・55歳)

前橋市民になってちょうど一年。東京を起点に神戸、長崎と移動し、そしてここ前橋を人生の仮の宿と決めました。

幸い前橋は緑が多く、水にも恵まれ、豊かな自然環境を有しています。今、わたしたちが安心して、心豊かに生活をしていく上で、大切な環境というかけ

は、一人ひとりが前橋市民としての誇りを持ちながら、ルールを守って住みよい町にしていきたいものです。

がえのない財産を次の世代にいかによりよい状態でバトンリレーをするか、わたしたちにとつての大きな課題だと思っています。

そんな観点から、大切な水と、さらにこれを作ってくれる緑をみんなで見つめ直してみてもどうかと考えました。里山紹介、名水探訪、お庭訪問、有機農園便りなどなど、市民と行政が同じ視点を持ち、一緒に考え、そして楽しく行動する。そんなきっかけづくりができればと思っています。